

勅撰集と本歌取り (二)

西畑実

はじめに

本歌取りとは、古歌の詞を引用して情趣を複雑化せんとする和歌修辞法であり、平安朝末期から鎌倉時代初頭にかけての歌壇において、盛んに行われたと説かれている。そういう修辞法が流行していた時代に編纂せられた『新古今集』の本歌取りについては、小島吉雄博士の御研究(『新古今和歌集の研究』)があり、これにつづく『新勅撰集』のそれについては、私の調査(『樟蔭国文学』第十号所収「新勅撰集と本歌取り」)がある。が、それ以後の勅撰集における本歌取りの実態については、まだ十分な考察がなされていないようである。そこで、この小論においては、『統後撰集』『統古今集』『統拾遺集』の四勅撰集を採り上げて、それらにおける本歌取りを調査することにする。ただ、これらの勅撰集はそれぞれ性格が異なり、ことに『統古今集』のごときは、撰者の一人たる藤原為家に対抗して一派を形成していた藤原光俊が撰集に関して大きな発言権を持ち、為家は撰集から半ば手を引いていた事情もあって、二条

家出身の撰者の単独編纂ではないけれども、歌に対する見解の相違は、二条家対京極・冷泉二家のごとく激甚ではなかったように思われるので、一往調査の対象にしておく。これによって、為家から為世に至る二条家の三撰者の本歌取りに対する好尚が明らかになるであらう。

1

本歌取りの歌は、催馬楽に拠るものや漢詩を踏まえた作を除くと、『統後撰集』に一四八首、『統古今集』に二六一首、『統拾遺集』に一八〇首、『新後撰集』に一六六首見出される。総歌数に対する百分比を求めると、それぞれ約一〇・八パーセント、約一三・五パーセント、約一二・三パーセント、約一〇・三パーセントということになるが、『統古今集』における本歌取りの歌の比率は、『新古今集』に、『統拾遺集』のそれは、『新勅撰集』のそれに匹敵する。

さて、これらの本歌取りの歌を内訳すれば、次のようになる。

(一) 続後撰集

出典	本歌	本歌取 りの歌	出典	本歌	本歌取 りの歌
万葉集	六	六	千載集	一	一
古今集	七四	九四	新古今集	一四	一八
後撰集	九	一〇	新勅撰集	四	四
拾遺集	八	九	伊勢物語	一	一
金葉集	一	一	源氏物語	三	三

(二) 続古今集

出典	本歌	本歌取 りの歌	出典	本歌	本歌取 りの歌
万葉集	九	九	詞華集	六	七
古今集	一二五	一六〇	新古今集	一九	二五
後撰集	一二	一四	新勅撰集	五	五
拾遺集	一七	二〇	古今六帖	二	二
後拾遺集	八	八	伊勢物語	四	四
金葉集	一	一	源氏物語	三	四

(三) 続拾遺集

出典	本歌	本歌取 りの歌	出典	本歌	本歌取 りの歌
----	----	------------	----	----	------------

(四) 新後撰集

出典	本歌	本歌取 りの歌	出典	本歌	本歌取 りの歌
万葉集	四	四	詞華集	四	五
古今集	九七	一二四	千載集	一	一
後撰集	五	五	新古今集	一四	一六
拾遺集	七	七	新勅撰集	二	二
後拾遺集	四	四	伊勢物語	一	一
金葉集	一	一	源氏物語	二	二

出典	本歌	本歌取 りの歌	出典	本歌	本歌取 りの歌
万葉集	三	三	詞華集	三	三
古今集	八八	一一一	新古今集	一四	一四
後撰集	一〇	二〇	新勅撰集	一	二
拾遺集	一四	一五	源氏物語	五	五
後拾遺集	七	六			

この表において、本歌の数よりも本歌取りの歌の数の方が増加ないし減少するのは、同じ歌を何度も本歌に取っていることと、二首ないしは三首を取り合わせて読んでいることによる。

次に、本歌取りの歌を残している作者を内訳にすると、左のとおりである。

歌集名	作者総数	新古今集 見作者数の 本歌取りの 歌数	新古今集 所見歌人 の歌数	百分比
続後撰集	七五	二八	七一	四七・九
続古今集	九五	二七	九五	三〇・八
続拾遺集	九四	一六	三七	二〇・五
新後撰集	一〇六	一九	三四	二〇・五

かように、『続後撰集』においては、当代歌人の本歌取りの歌数と古人のそれとがほぼ均衡しており、その他の勅撰集においても、本歌取りの歌の総数の約三分の一ないしは約五分の一を新古今歌人の作が占めていることは、本歌取りの消長を考えるうえに見逃せない事実であろう。

2

今度は、本歌に取られていた度数の多い歌で、五回以上本歌に取っている歌を挙げてみよう。(括弧内の数字は『続後撰集』以下の四勅撰集における本歌取りの回数である)

- (一六) あり明のつれなくみえし別より曉ばかりうき物はなし
壬生忠岑
- (一一) きみをおきてあだし心をわがもたばすゑの松山浪もこ
えなむ 読人しらず
- (一一) 世の中はなにかつねなるあすか河昨日のふちぞけふは
せになる 読人しらず

- (一〇) わが恋はゆくへもしらずはてまなしあふを限と思ふばかりぞ 凡河内躬恒
- (九) 名取川せせの埋木あらはればいかにせんとかあひみそめけむ 読人しらず
- (八) 今こんといひしばかりになが月の在明の月をまち出でつるかな 素性法師
- (七) さ月まつ花たちばなのかをかげば昔の人の袖のかぞする 読人しらず
- (七) おほかたは月をもめでじこれぞこのつもれば人のおいとなるもの 在原業平
- (七) よそにのみ見てややみなん葛城や高間の山の嶺の白雲 読人しらず
- (七) おもはず袖にみなどのさわぐかなもろこし舟のよりしばかりに 読人しらず
- (六) かたいとをこなたかなたによりかけてあはずは何を玉の緒にせむ 読人しらず
- (六) 月やあらぬ春やむかしの春ならぬわが身ひとつはもと
の身にして 在原業平
- (六) わが心なぐさめかねつさらしなやをばすて山にてる月
をみて 読人しらず
- (五) 夏のははまだよひながらあけぬるを雲のいづこに月や
どるらむ 清原深養父
- (五) しらつゆもしくれもいたくもる山はしたばのこらず色

づきにけり 紀貫之

(五) むすぶ手のしづくににごる山の井のあかでも人に別れぬるかな 紀貫之

(五) 名にしおはばいざこととはむ宮ごどりわが思ふ人はありやなしやと 在原業平

(五) 枕より又しる人もなき恋を涙せきあへずもらしつるかな 平定文

(五) ぬるがうちにみるをのみやは夢といはむはかなき世をも現とはみず 壬生忠岑

(五) いにしへの野中の清水ぬるけれど本の心をしる人ぞくむ 読人しらす

(五) あさぢふのをのしのはらしのぶれどあまりてなどかひとのこひしき 源等

(五) 君すまばとはましものをつのくにのいくたのもりの秋のはつ風 僧都清胤

ここに挙げた歌で、『新古今集』においてもたびたび本歌に取られているのは、小島吉雄博士の御調査に拠れば、「さ月まつ」が十回、「月やあらぬ」が七回、「今こんと」が四回、「きみをおきて」、「世の中は」がそれぞれ二回ということである。ところが、『新古今集』において六回本歌になっている

さむしろに衣かたしきこよひもや我をまつらむ宇治の橋姫は、四勅撰集を通して僅か一回のみ、五回本歌に取られている

忘るなよほどは雲居になりぬとも空行く月のめぐりあふまで

もおなじく一回、ともに三回本歌になっている

このまよりもりくる月のかげみれば心づくしの秋はきにけりわがいははみわの山もとこひしくばとぶらひきませ杉たてる門の二首も、『新古今集』と同数にとどまっている。

いま、四勅撰集において、「さ月まつ」を本歌に取っている作者を調べてみると、藤原家隆、慈円、土御門院（二首）、藤原師継、公豪、中原師宗の六名ということになるが、三名までが新古今歌人ないしはもつともそれに接近している時代の歌人なのである。次に、「月やあらぬ」に本づいた歌を残しているのは、俊成卿女、源俊平、後嵯峨院、藤原実経、宗尊親王、源時清の六名であり、新古今歌人は俊成卿女のみであるけれども、後嵯峨院は後鳥羽院の、実経は良経の孫であって、ともに新古今歌人にゆかりのある人々である。また、「あり明の」は、十六名がこれを本歌にしているが、読人しらすを除き、俊成卿女ただ一人が新古今歌人、「わが恋は」を用いている新古今歌人は式子内親王のみ、「よそにのみ」を本歌にしているのも、『新古今集』の撰者たる藤原有家一人であり、さらに、「今こんと」、「ぬるがうちに」を本歌としている新古今歌人の作は一首も選入せられていないのである。かように、本歌を取るに際しても、作者の好みが時代的に推移していることは、注目に値しよう。

3

しからば、誰の歌が頻繁に本歌に取られているかといえば、次のごとくである。

読人しらず一四三首（十二回本歌となるもの一首、十一回一首、九回一首、七回四首、六回一首、五回一首、四回九首、三回一四首、二回二〇首）
 在原業平二六首（七回本歌となるもの一首、六回一首、五回一首、三回七首、二回四首）
 柿本人麿一五首（四回本歌となるもの二首、三回一首、二回二首）
 紀貫之二七首（五回本歌となるもの二首、三回一首、二回二首）
 素性法師二一首（八回本歌となるもの一首、四回一首、二回一首）
 紀友則一〇首（三回本歌となるもの二首、二回三首）
 伊勢一〇首（四回本歌となるもの一首、三回一首、二回四首）
 小野小町九首（四回本歌となるもの二首、二回二首）
 壬生忠岑九首（一六回本歌となるもの一首、五回一首、二回二首）
 凡河内躬恒八首（二〇回本歌となるもの一首、三回一首、二回二首）
 僧正遍昭七首（四回本歌となるもの一首、二回一首）
 六首以下は省略したが、これをも加えると、読人しらずの歌は、延べ数にしても、全体の半数には及ばないであろう。作者の明らかなか歌においては、柿本人麿の作品が第三位を占めているが、『万葉集』の所記に従うならば、僅か四首に減少する。さらに、これを延

べ数にしてみると、在原業平六八首、紀貫之・壬生忠岑各三二首、柿本人麿二七首、紀友則二〇首、小野小町一九首、僧正遍昭一一首ということになる。

4

以上の調査表を通じていえることは、『統後撰集』内至『新後撰集』の歌人は、在原業平の歌にもっとも親炙しており、それに次いで、紀貫之、壬生忠岑の歌を愛好している。これは、大体において、新古今歌人も新勅撰歌人もこのごとくであった。しかるに、彼らは、『古今集』における六歌仙時代の作者の歌に匹敵するほど撰者時代の作者のそれを好んでいるのである。しかも、彼らは、「さむしろに」および「忘るなよ」の歌がそれぞれ一回しか取られていない事実が物語っているように、どちらかといえは、感傷的な歌に対して冷淡であり、「人生詠歎的内容の歌」を本にしている作も残してはいるけれども、それは、主として、新古今集所見の歌人において認められるのであって、当代の歌人は、いかにも古今調を鋭く代表するような巧緻な歌を好んで利用しているようである。すなわち、彼らは、『古今集』における時代の古い歌人の詠ですら、「小説的連想を伴ひ易い」、「綿々たる懐旧の情に溢れた」歌よりも、むしろ、趣向の目立つ、智巧的で優雅な美を湛えている歌の方に親しんでいるといえる。この傾向は、読人しらずの詠を本歌にしている場合も同様で、おほかで素直な歌に勝るとも劣らないほど、古今風の要素の比較のいちじるしい歌が取り上げられているのである。^{（註）}

してみると、『続後撰集』内至『新後撰集』の歌人は、本歌取りに当って、「人生詠歎的抒情歌」をたいして庶幾していなかったこととなるが、これは、新勅撰歌人と軌を一にするものである。

『新勅撰集』の歌風の特徴は平淡美にあった。『和歌文学大辞典』によれば、『続後撰集』の作品は「平板で無気力」であり、『続古今集』の歌風は「概して平淡」で、『続拾遺集』もほぼ同様、『新後撰集』は「迫力や新鮮味の乏しい」歌集である。これらの集においては、一般的にいつて、本歌の取り方も平板で、『新古今集』におけるそれよりはるかに見劣りがする。そこにも、それぞれの勅撰集における歌風が色濃く反映しているといえるであろう。

およそ二条家の当主は、たとえ、為家が「常に古歌をとらんとたしなむはわろき也。いかにもわが物とみゆる事なし」(『詠歌一体』)といい、為世が「またあながち本歌とる事は宜しからぬ事也。近代の人の歌取るべからず。冥加なき事也」(『和歌秘伝抄』)とい

っているように、本歌取りに対してあまり積極的ではなかった。こういう撰者の態度が、平板な本歌の取り方の誘因になったのだといえそうである。

これ以後の勅撰集において、本歌取りがいかに展開したかは、二条家の撰者による『続千載集』以降の集、京極家の撰者ないしはその継承者による『玉葉集』『風雅集』を調査しなければ、しかとしたことは述べられないが、本歌取りは、新古今歌風の消長と運命を共にしたであろうことは容易に想像できそうである。

(註)

『新勅撰集』においては、「五月まつ」、「さむしろに」、「このまより」、「わがいはは」の歌を本歌とするものが一首もなく、「月やあらぬ」の歌が一回、「きみをおきて」、「今こんと」、「おほかたは」、「かたいとを」、「忘るなよ」、が二回、「あり明の」、「世の中は」が三回本歌になっている。これらの多くは智巧美の歌であって、かような歌をしばしば本歌にしている後代の歌人は、本歌取りに対する態度において、新勅撰歌人とほとんど径庭がなかったといえそうである。

本歌取り一覽

万葉集	一〇七	続後撰二九二	新後撰二七一
五十一 新後撰五一	三六一	続古今六五〇	新後撰三五二
五七 続古今三二八	三九六	続古今九九〇	続古今四七〇
	五七五	続古今一六四八	続古今二七八 続拾遺一九五
	九二二	続後撰四九〇	続古今一二七二
			一八九七

一九〇八	統拾遺四七三	四四	統古今一三三	統拾遺五一八	一三三	五一二	新後撰一二三五
二二七〇	統後撰六七二	四五	統古今四三二			統古今一九〇	統拾遺一四三
二三五三	統後撰三二四	四九	新後撰六七			新後撰一四四	
三〇八七	統古今五一五	五二	統後撰九六			統古今一七七七	
三四六八	統後撰三六八・九六一	五三	新後撰八一			統古今二二七	
	統古今三二八	五六	統拾遺七三			統後撰一〇四九	統古今二四
三五三〇	統拾遺三四三	六二	統古今一二六			六・二四七・二五一	統拾遺
四〇五六	統拾遺三〇五	六三	統古今一一一	統拾遺一一三		一七六・五五〇	新後撰一二
			新後撰一三七			八六	
			統拾遺九五			統後撰一九四	
古	古今集	六九	統拾遺五一			統拾遺一八三	
三	統拾遺七	七一	統古今一八八〇			統後撰一七五	
四	統後撰一八	七五	統古今一四〇・三〇八	統拾		統後撰一九五	
五	統古今一八七三	七六	遺一二三	新後撰一二九		統古今一六一	
一三	統古今二八・五七		統後撰一二七			統古今一九〇・二〇九・二六	
七		八一	統古今一四二	新後撰八〇		二	統拾遺一三三・一六六
一八	統拾遺二〇	八四	統後撰一〇四			新後撰一九六	
二二	統拾遺一〇〇	八五	統古今四七五	新後撰七一		統古今三二五	
三五	統古今一五〇七	九三	統後撰一三九			統古今五一三	統拾遺二八七
三六	統後撰九四	九五	統後撰一〇四四	統拾遺四八		新後撰三六九	
三八	統拾遺四九	九七	六・八六四			統後撰九二五	
四三	統古今一一六	九八	新後撰一一七			統後撰二九八	統古今二三八
	統拾遺一三五	一一三	統後撰六四	統拾遺四八九		統古今六〇六	

二〇五	新後撰一二七	今一六三二	後撰一九〇
二〇七	統拾遺五八二	統古今五七二	新後撰五三二
二〇九	統後撰二七六	統拾遺六二七	統古今六六九
二一九	統古今七七〇	統古今一一一二	統後撰一一二二
	新後撰一三〇	統拾遺三九	統古今二六
	三	九 新後撰九〇六	二・一三六〇
二二〇	統後撰二五九・九二三	統拾遺三〇〇	統拾遺一四〇
	遺三四〇	統拾遺三九七	新後撰四〇九
二二六	統古今八二四	統拾遺三七四	新後撰四八五
二二二	統古今四四一	統拾遺四〇九	統拾遺七〇二
二四一	統古今三五二	・四六四	新後撰五六七
二四七	統古今一二七八	統古今六六八	統古今九四三・九四四・九四
二四九	統古今四八〇・九〇二	統後撰二八	五・一六七六
	遺三五三	統後撰五一七・一一七二	統拾遺一三三
二五三	統古今五〇八	統古今一八八七	統後撰一九六
二五五	統古今四三三	新後撰一五七八	統後撰四三四・四四五
二五八	統拾遺二二三	統拾遺一四一八	遺三六八
二六〇	統古今五二五・五七四・九六	新後撰一三五	新後撰三二八
	四 統拾遺三六二	統古今四七九	統後撰五一八
	新後撰八	新後撰一五六	統古今一二
	〇五	五	新後撰六五・九
二七三	統拾遺三四九	統古今一七七四	一八
	新後撰一五八	新後撰六三・九〇	統古今二五八
	九	統後撰四一五	統拾遺一六一
二八三	統古今三二三	統拾遺四五〇・一一〇三	統拾遺一六一
二八八	統後撰四五四・四六八	新	統拾遺一二九・九七七

四八〇	統拾遺一〇〇五	五四三	統後撰九一〇	統拾遺二一〇	六一八	統後撰九二一	六四八	統古今二二〇・四八三
四八三	統後撰七二七	五五三	統拾遺八四六	統拾遺三二〇	六一八	新後撰三二四	六四九	統後撰二〇九
	・三四六・一一一六・一一一七	五五四	新後撰一〇八三	統古今四四三	六一八	新後撰三二四	六五〇	統後撰一二六・八九五・一一一
	七 統拾遺四一・八五六	五五五	統後撰二九七	統古今四四三	六一八	新後撰三二四	六五〇	〇八・一一三〇〇 統拾遺九一
四八四	統後撰一九三	五五六	統後撰六七〇	新後撰四九九・六六六	六一八	統後撰九二一	六五八	五 新後撰二二二・八一七
四八五	統後撰二一七	五五七	新後撰四九九・六六六	統古今二四〇	六一八	統後撰九二一	六五九	統古今一九三
四八八	統古今一一四九	五五八	統古今二四〇	統後撰七二三	六一八	統後撰九二一		統古今二四〇
四八九	統古今一二三三	五五九	統後撰七二三	新後撰八〇七	六一八	統後撰九二一		
	六	五六二	統拾遺九九四	統拾遺八〇七	六一八	統後撰九二一		
四九〇	統古今五七六	五六二	統拾遺九九四	統拾遺八〇七	六一八	統後撰九二一		
四九七	新後撰三一六	五六五	統後撰六四七	統拾遺九三三	六一八	統後撰九二一		
五〇一	新後撰九三二	六〇三	統拾遺九三三	統古今八七四	六一八	統後撰九二一		
五〇四	統古今一一五八	六一一	統後撰七二三	統古今一〇七七	六一八	統後撰九二一		
	四・七八五 新後撰八〇八		統後撰七二三	統拾遺三二〇	六一八	統後撰九二一		
五一二	統後撰七七七		・八三五・九三八 新後撰八	〇・九五一・九五四・一〇	六一八	統後撰九二一		
	・一五六八・一五六九		七八		六一八	統後撰九二一		
五一三	統古今四九六		統後撰九二一		六一八	統後撰九二一		
	統拾遺三七一		統後撰九二一		六一八	統後撰九二一		
五一六	・一一八九 新後撰三三二		統後撰九二一		六一八	統後撰九二一		
	統古今一一八五・一二〇〇・		統後撰九二一		六一八	統後撰九二一		
	一二五四・一三三一		統後撰九二一		六一八	統後撰九二一		
五二二	統拾遺五一七・八五〇		統後撰九二一		六一八	統後撰九二一		
	新後撰九四八・一〇三六		統後撰九二一		六一八	統後撰九二一		
五三三	新後撰四九六		統後撰九二一		六一八	統後撰九二一		

六六二	統古今一〇一五 統拾遺八二四 新後撰四九七	七二七	一 新後撰四四〇・一〇〇三 統古今二二三	七八〇	統後撰三四九 統古今五〇四・六五八 新後撰一〇四七 統古今一〇〇六 統拾遺一〇一七
六六五	統拾遺一八三	七二八	新後撰五六	七八二	統古今一〇〇六 統拾遺一〇一七
六七〇	統後撰六四二 統古今一一五八 統拾遺七八四・七八五	七二〇	統古今六三四	七八四	統拾遺二〇五
	新後撰八〇八	七二二	統拾遺五五一 新後撰八九一	七八五	統古今五八〇
六七一	統後撰四八六 統古今二一七	七二四	統古今九六七 統拾遺七六八・七六九・七七〇	七九三	統古今四一一 新後撰四五五・四六五
	統拾遺八二三	七二五	統古今五三二 統拾遺五六四		
六七六	統後撰六四二 統拾遺七八五		新後撰一一五六	八〇七	統後撰七三〇 統古今八九八
六八〇	統古今一六五五	七二七	統古今二九三・一二三二 新後撰二八五・一二二九	八一	新後撰三七八 新後撰三九一
六八二	統拾遺一九〇		統拾遺三九	八二二	統拾遺二二五
六八八	統後撰二九九	七三二	統拾遺三九	八二二	統拾遺二二五
六八九	統古今四九六	七三四	統後撰八二 統拾遺二〇七六	八二四	統拾遺一〇一六
六九〇	統後撰八〇一	七三六	新後撰一一二四	八二八	統古今一〇三〇 統拾遺一〇九四
六九一	統後撰一七八・九七四 統拾遺一五三・九〇四・九〇五・九〇六・九〇七・九五七	七三七	統拾遺一〇六四	八三五	統古今一八一〇・一八一・一八一二・一八一六 統拾遺八四二
六九六	統古今三九八	七四七	統後撰一三七・一三八 統古今七六八 統拾遺三一六・五二三 新後撰一二六四		
六九九	統古今一一一九	七五六	統古今八八八	八三六	統古今六三九
七〇六	統古今一五六五	七五八	新後撰九〇四	八六一	統古今一四八〇
七〇七	統古今五三八	七六一	統後撰四七七・一一五四 統古今一〇七一	八六四	統拾遺三六七
七〇九	統古今五二二			八六五	統古今三四八
七一二	統後撰六〇三 統古今一一五	七六八	統古今四一三	八七二	統後撰一〇五七 統古今六七

八七三	七 統拾遺六五〇 新後撰四七六	九二五	統後撰二二〇	九八二	統後撰五〇三・五〇四・八三六
八七三	統拾遺一〇六二	九三〇	統古今一〇三二・一〇三四	九八四	統後撰一〇一
八七三	統後撰三五二 統古今四一四	九三三	統拾遺五一九 新後撰二三六	九八七	統後撰一三二六 統古今二四八四 新後撰一五〇七
八七九	・四七六・一八六〇 新後撰一九一・三四二		九二 統古今二四三・六三三・一〇九九・一七〇八・一七〇九・一七一〇 統拾遺二三六九 新後撰一三一八	九八八	統古今一四八四
八七九	統後撰三六五・一〇六五 統古今六七一・一七五一 統拾遺五〇六 新後撰三八九・一三四	九三四	統古今一四八二	九九一	統後撰一二二四 統古今一九〇一
八八七	統古今一七二五・一七八八	九三五	統拾遺五八五	九九七	統拾遺五四三
八八八	統拾遺一〇五二 新後撰六一四・一二一四	九三六	統後撰三六五	一〇〇〇	統拾遺一一二〇
八八八	統後撰三八二 統古今一三五六 新後撰一四七二	九三八	統後撰四九一	一〇〇一	統後撰七七二
八九三	統古今二六四一	九四三	統後撰一一六二	一〇〇三	統古今一七八六・一七九三
九〇〇	統後撰一〇六四	九四四	新後撰一三六六	一〇〇四	統古今七〇七
九〇一	統古今一〇九	九五二	統後撰一一八四 統古今三六六 新後撰一三七〇・一三七六	一〇〇七	統古今六三・二七三 新後撰一七
九〇九	統拾遺一一〇五	九五五	統古今一六二三	一〇〇八	統古今六三 新後撰一七
九一一	統後撰四八〇・一〇二二	九五九	統古今九五九	一〇〇九	統後撰八九四 統拾遺一八五・一〇五九 新後撰一一九
九一三	統後撰一三二五	九六五	統古今一五九五 統拾遺五七七 新後撰九六〇	一〇二八	統古今一〇二八 統拾遺八三一 新後撰二三四・七七七
九二二	統古今二四七八 統拾遺一一〇〇	九七一	統古今六六四	一〇五一	統古今七八四・一三八八
		九七二	統古今六六四	一〇五六	統古今一二四
				一〇六〇	統古今三六七

一〇六三	統拾遺五三一	一〇三三	統拾遺七二	九六一(〓拾遺集七六六) 統後撰七五六
一〇六九	統古今一八九六	二〇七	統後撰二〇八	一〇七六 統古今一七六〇
一〇七二	統後撰三九九	二〇九	統拾遺九九四 新後撰一二九	一〇三三 統古今一七七九
一〇七三	新後撰三三三	一	一	一九七 統古今九二六
一〇七九	統古今一二二三・新後撰八一	二三九(〓拾遺集一四四) 統後撰一九八	統古今三一五	一二八二 統古今四二四 新後撰二八九
九	九	三〇八	統後撰二四一	一三〇七 新後撰一〇四二
一〇九〇	新後撰六〇七	四二五	統古今五二三	一三一八 新後撰五四五
一〇九二	統後撰六〇四 新後撰一三	四四五	統古今一六二九	拾遺集
九九	九九	四六六	統後撰四五〇	一五 統古今六二
一〇九三	統後撰九四二・九四三・九四	五一六	新後撰九〇九	五四 統拾遺八八六 新後撰一二五
	四・一六〇・一六一 統	五七八	統後撰二六四・三六九 統古	七 統後撰二
	拾遺一〇二五・一〇二六・一		今四三九・八八一 新後撰一	
	〇二七・一〇二八・一一〇四	六四七	六三	六四 新後撰二
一〇九九	新後撰一〇三八・一四〇一	七〇六	統後撰七八〇	七六 統後撰一五五
	統後撰一〇二七 新後撰八九	七五五	新後撰四〇二	八〇 統古今一八八
	三	七四三	統拾遺一二六三	一〇六 統古今一一一
一一〇八	統拾遺一〇三六 新後撰九〇	七七七	統後撰七二九 統拾遺三〇七	一三一 統拾遺二二一 新後撰二四七
後撰集	後撰集	八二六	統古今三一七 統拾遺一一八	一四五 統後撰二四七
二	新後撰一二	八四七	統古今五四九・一一四四	一七一 統古今四〇一
五〇	統後撰一二二 <small>註</small>	八九一	統古今三五五	一八四 新後撰一五八八
六四	統古今一五二	九一七	新後撰八一五	一八八 統拾遺三六〇
			新後撰九三七	二五一 統後撰五〇八
				二七一 統古今一八九八

四四五 統古今一六八七
 四七〇 新後撰四七
 四八三 統後撰一三二
 四九一 統古今三八・一七五五 統拾遺四三二 新後撰一二二
 五六〇 統拾遺二四〇七
 五六三 統古今一四九八
 五六五 統古今一八四四
 六二二 新後撰七八一
 六四六 統後撰七八一・八七〇
 六六八 新後撰九〇〇
 七一〇 新後撰一〇一〇
 七二二 統古今一一三〇・一一七三
 七六五 統古今一一四八
 七七八 統後撰二一一
 七七九 新後撰七七九
 八四八 統古今一三二〇 統拾遺八九七
 八四九 統古今一七四
 八五三 統古今一三三七 統拾遺四七
 一・一三八五・一三八六
 八五六 統後撰一八五六
 九〇一 統拾遺一〇三一

九六七 統古今四四 新後撰二一九
 九六九 新後撰六五七
 一二二八 統古今五一四
 一二〇一 統古今一一二二・一一二三
 一一〇一 新後撰一五八〇
 一二九九 統後撰一九二二
 四三 統古今四六
 二一九 統古今一五六〇
 三三三 統古今三七六
 三九〇 新後撰一三八〇
 五一八 統古今八七七 統拾遺六七四
 新後撰五七五
 六二六 統古今一五〇一 統拾遺一〇三二
 六八〇 統古今一三〇
 六九一 統古今一一二八 新後撰三五
 七〇六 新後撰七九八
 七〇七 新後撰八〇〇
 七七〇 統拾遺一〇二五 新後撰一〇三八
 八一八 新後撰八〇〇
 九四〇 統古今一七三三 統拾遺二九四

後拾遺集

金葉集

一九一 統後撰一三三七
 五〇一 統古今一〇九六
 五八六 統拾遺四五八

詞葉集

七一 統古今二五八
 八一 統古今五六一・一五〇九 統拾遺三一二・三五九 新後撰三七一

千載集

八三 統後撰一二二七

六四〇 統拾遺二〇〇

九〇四

統後撰一五六三 統古今九二二

一六一四 統後撰五〇一・一〇四六

新古今集

九九〇

二 新後撰一五六三

一六四八 新後撰三八

九 統拾遺六

九九一

統後撰三五〇 統古今八九・九二

一六八七 新後撰一九五

二一 統後撰六八

九九一

九二 統拾遺一〇四・二八九・三五四 新後撰三二

一七〇五 新後撰四九六

三二 統古今三六

九九一

統後撰六七八・一〇一〇 統古今一三二八

一八一 統古今二〇九

一七五 統後撰四三・四五五 統古今

九九四

新後撰七九五

一八五五

統後撰五五一 統古今一〇九

三四三 統古今三四九

一〇五〇

統拾遺二五七

一九一六

統後撰二〇〇 統拾遺一八六

三四六 統古今三八〇・四八 新後撰九二二

一二二九

統拾遺一〇六九

新後撰五五六

四五九 新後撰三七七

一三五七

統後撰七二七・七二八 統古今六〇八・一一〇二・一一〇三・一一〇四

四五六

統古今七七六 統拾遺九九四

四九五 統拾遺二四四

一三六一

統拾遺九六四

四九二

新後撰六六八

六二〇 統古今六一九(二六〇七重出)

一三六七

統拾遺九六四

四九二

統古今一八九七

六四一 統後撰四八三

一三六八

統拾遺六一六

四九二

統後撰一三一

六四三 統古今六二〇

一三七五

統拾遺八五七

七二七

統古今九八四

六五四 統古今一七四二 新後撰四九二

一四〇八

統拾遺三七二・一一二八

七三六

統後撰九一七

六五七 統拾遺四四七 新後撰五二〇

一四三一

統後撰三三七 統古今一〇七

八一七

統拾遺九三二

七〇七 統後撰五九一

一五八八

統後撰三三七 統古今一〇七

八八一

統古今一三一七

七五七 統古今七七二 統拾遺一三四六

一五八九

統後撰九一一 統拾遺二七八

八八五

統後撰七七九

八九六 統古今七

一五八九

統後撰九一一 統拾遺二七八

九四四

統後撰六五八 統古今一〇〇

九〇〇 新後撰三四〇

一五八九

統後撰九一一 統拾遺二七八

九四四

統後撰六五八 統古今一〇〇

新勅撰集

古今六帖

三三〇一 統古今四七二
三三四二 統古今一三六一

伊勢物語

一九 統古今三五四
三二 統拾遺二四
六〇 統古今一二五一
六七 統古今一二一九
八〇 統後撰九四九
一四三 統古今六四一

源氏物語

七七六 統拾遺六八〇
七八五 統古今二六六・二九五
七八六 新後撰一二九四
七九三 新後撰三九七
八四九 統後撰一二二五
九三七 統後撰六七九
九五五 統後撰一一六三
九五九 新後撰一二一七
一〇一五 統古今一六四七

一〇二八 統拾遺一〇七九 新後撰四〇

一二四三 四

一五三三 統古今二〇二
新後撰九九五